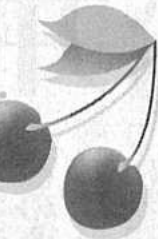


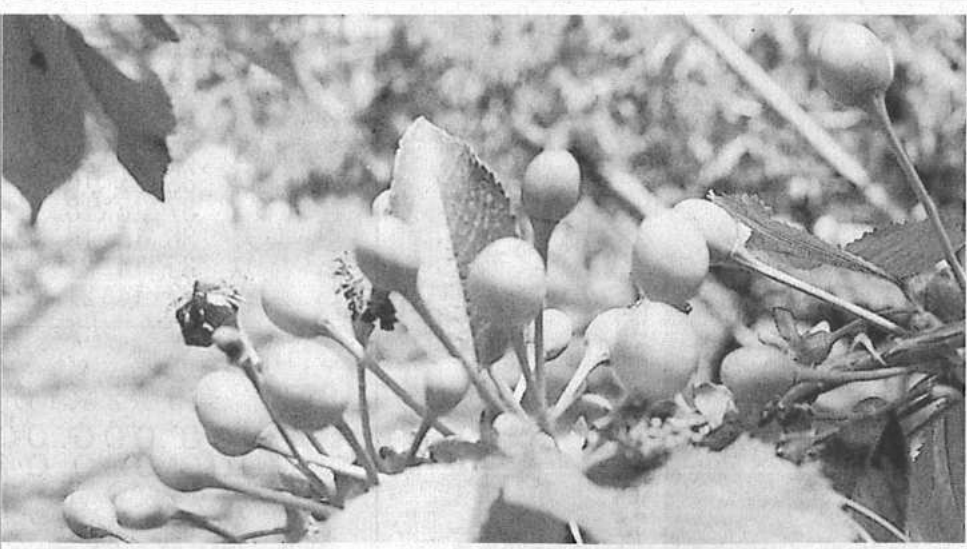
幸福の赤いサクランボ



多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2・1畝のサクランボ園を経営する。

今年、私の農園の主力品種・佐藤錦の開花は、例年に比べると6日ほど早い4月16日だった。発芽して満開になるまでの間に霜が降りてしまうと、つばみの中のみしべが枯れてしまう。そのため、花粉の人工交配の準備、殺菌剤の散布など開花中に不可欠な作業をしながら、満開が過ぎるまで、霜害から花を守るため多くの時間を割いてきた。

そのかいがあつてか、今年は目立った霜害もなかった。開花期間中は



成長中のサクランボ、佐藤錦の実。左から1、2番目の小さい実は「生理落果」する可能性が高い。山辺町の多田農園

「生理落果」気をもむ時期

好天に恵まれ、受精は順調になされたと見ている。

サクランボのほとんどの品種では、例年5月半ばを過ぎないと結実を確認できないのだが、今年は大連休が終わった時点である程度確認できる状態になっている。

ただし、佐藤錦については最終的にどれだけ実になるかは予断を許さない。それは「生理落果」という現象があるからだ。

佐藤錦の場合、正常な花が咲き花粉が付いたとしても、受精して結実するのは多くとも咲いた花数の3分の1程度。3分の1くらいはうまく受精せず、花が落ちる。また、3分の1くらいは実が小豆粒くらいまでの大きさに膨らんだところで、開花から30日後ごろまでに落果してしまう。たくさん実をつけすぎると木そのものの生育が阻害されるので、自ら調整しているのではないかと考えられている。これが「生理落果」と呼ばれる現象で、佐藤錦には多い。

特に開花期に天候不順に見舞われてしまい、受精が「うまくいかなかったのではないか」と思える年は生理落果が多くなる。

この時期は小豆粒くらいまで育った実を眺めながら、「どうかこのまま結実してほしい」と祈る気持ちになる。6月中旬を迎える収穫期まで自分でも過保護と思うほどの手入れをし、これが山形の佐藤錦だと言えらるものになるよう育てていきたいと考えている。